

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

奈良民俗文化研究所で公開講座「日本の民俗をきく」を始めて5年が経った。研究員が民俗関係の古典的な著作などをテーマに、朗読と解説を通して、私たちの生活や文化を考えようとするもので、これまで通算22回開催してきた。3月は私の担当で「吉野の民俗誌」と題して、これまで吉野を踏査してきた人々の仕事を紹介した。

この「吉野」の地名について中世史家、小山靖憲は、「野」を未開地と考えると、吉野はよき未開地、高野は高い所にある未開地、熊野は奥また所にある未開地となり、共通した性格を持つ

ものとして理解できるとしている（「吉野・高野・熊野を行く」）。柳田国男も「野といふのは山の裾野、緩傾斜の地帯」を意味するとして、歴史的にも開発可能な「野」は未開の草原である「原」とは区別されてきた。

吉野は、古代からその美しさが讃えられ、宮や離宮が置かれ、万葉集にも度々登場するが、それは吉野川流域の「口吉野」の一部で、吉野郡のほんの入り口だった。吉野川の流域だけでなく、さらに山々が連なり広大で奥深



篠原の集落—筆者提供

吉野の踏査民俗誌

には、大和の氣風を「山城の國より人の氣少し尖なる所あり」とし、「表郡は人の氣大形、名利を好むもの多し。奥郡は隠る氣これ有り」と評している。奥郡の人々は、戦いを繰り返しつつ合従連衡に明け暮れてきた國中（盆地部）の人々とは異なる氣風であると捉えられていた。

この吉野郡を実際に踏査した人としては、江戸時代末の医家で博物学者の畔田伴存（寛政4年～安政6年）がまず挙げられる。吉野郡を記録した

には、「和州吉野郡群山記」には、大峯奥駈道や大塔・十津川方面の暮らしが見聞に基づいて詳細に記している。正月の篠原踊りで知られる篠原について、「この地、古ヘ篠多きゆゑ名づく」この村、正月二十四・二十五日酉日、躍有り。川瀬躍と云ふ。村内に躍堂あり（草葺なり）。この内にして躍る。近村より諸人群をなし来たり、これを見る。その來たりし者、親疎によらず、酒飯を出し饗應す。これこの地の風なりと云ふ」と記し、躍堂という専用の場所で踊っていたことも分かる。

（奈良民俗文化研究所代
表）

次回は17日